

在インドネシア総領事から

東ジャワから見た 日伊関係の発展



在スラバヤ日本国総領事
竹山 健一

●戦前の風景に思いを馳せて

このたびスラバヤ総領事として着任した竹山です。

インドネシアにはこれまでジャカルタで大使館に3回(1986~1990年、1995~2000年、2012~2019年)とマカッサルで総領事館(現領事事務所、2002~2005年)に勤務したことがあり、今回が5回目のインドネシアでの勤務となります。

スラバヤ総領事館は、インドネシアがまだオランダ領東インドであった1920年に在スラバヤ日本帝国領事館として開設されてから昨2020年に100年(先の大戦中の11年間の閉鎖期間を含む)を迎えた歴史のある総領事館であり、このように歴史のある総領事館に勤務できることを光栄に思っています。

スラバヤの旧市街にはオランダ時代のコロニアル風の建造物や建物が歴史的文化遺産に指定されそのまま残っています。戦前のスラバヤ日本帝国領事館だったとみられる建物も残っています。戦前のスラバヤの風景や面影を想像しながら、もっと深くスラバヤについて勉強してみたいと思っています。そういえば30年以上前の語学研修中に読んだプラムディアの「人間の大地」の舞台がスラバヤだったことも思い出したので、本を読み直して物語中に出てくる場所も辿ってみたいとなりました。

●「ブランタスの奇跡」と日本の貢献

ジャワ島には東西を貫いて3000メートル級の火山(帯)が連なっていますが、東部ジャワはこの火山(帯)が密集し、これらの山々からの火山灰と山々から流れ出た川が肥沃な土壌をつくり農産物の豊かな生産を促してきました。中でもスラバヤに向かって流れる全長320キロにおよぶブランタス河の流域はジャワ島でも有数の穀倉地帯ですが、この一帯は常に洪水や干ばつ、さらには火山の噴火による大量の噴火物の河川への流入に悩まされてきました。

この問題に取り組むため、インドネシア政府はこの流域の治水、灌漑、農業振興、水力発電などからなる「ブランタス河総合開発計画」を推進することとしました。1958年に日・インドネシア間の賠償協定が発効すると賠償による開発資金でまずカランカテス・ダム建設が進められましたが、その際、ダム建設に参加した日本企業・技術者からインドネシア人技術者の育成と技術移転が行われ、その後のインドネシアの水資源開発分野で主導的な役割を果たす人材が多数輩出されました。この事業はモノだけではなく、ヒトを作る日本の経済協力の好例としてよく取り上げられています。

カランカテス・ダム建設以後も日本は排水トンネルや複数のダム建設、発電所の建設、灌漑施設整備を40年以上にわたって支援し、洪水被害の制御、農産物生産の著しい向上、安定した電力供給など東部ジャワの経済発展に大きく貢献し、「ブランタスの奇跡」といわれるほどインドネシアの発展に寄与しました。

●120年にわたる日本とスラバヤの関係

スラバヤは天然の良港であるタンジュン・ペラック港の後背地としてオランダ植民地時代には経済の中心地として栄えた町で、いまもタンジュン・ペラック港のコンテナ貨物取扱量は2019年時点で390万TEU（世界第45位。TEUは20 feetで換算したコンテナ個数を示す単位）であり、横浜港の約300万TEUを大きく上回っています（出典：日本港湾協会統計）。

日本との関係では、1900年頃から多数の日本の商店が店を構え、戦前には大きな日本人社会が形成されていました。現在はインドネシアへの日本企業の進出の拠点はジャカルタが中心ですが、実は戦前はスラバヤが拠点で、日本からの渡航者は船舶でまずスラバヤに入り、その後にはパタビア（現在のジャカルタ）などに移動していたといえます。

1967年に外資導入法が施行されると日本企業のインドネシアへの進出が盛んになりましたが、スラバヤを含む東ジャワ州への進出も盛んになり、スラバヤ市、それを取り巻くモジョクルト県、パサルアン県、グレシック県などに多数の日本企業が進出しています（東ジャワ州全体では約150社の日系企業が操業しています）。2017年から2020年までの東ジャワ州と日本との貿易統計を見てみると、この4年間、東ジャワ州からの輸出先として日本は1位。逆に東ジャワ州の輸入では日本は4位または5位の輸入元となっています。

1984年に東ジャワ州は大阪府と、1997年にスラバヤ市は高知市と姉妹都市を締結し、交流が続いており、首長同士の相互訪問も行われています。また2010年にスラバヤ市長に就任したリスマ氏（2020年12月に社会大臣に就任）は市の美化・環境対策を推進し、北九州市と環境姉妹都市提携し、様々な取り組みが行われています。

●ウィズコロナでの事業・活動再開を目指して

昨2020年3月以降、インドネシアで新型コロナウイルス感染が拡大し、特にスラバヤでは6月から7月に他の都市との比較で感染拡大がひどく、国が指定する基準で最も高リスクとされるレッド・ゾーンを超えて、法律で定義のない「ブラック・ゾーン」と揶揄されました。しかし、リスマ市長（当時）の強力なインドネシアティブにより実施された取り組みの結果、10月以降は大きな波はなく市の一日あたりの新規感染者数は6月初頭現在約20名前後（陽性率0.8%）で推移しています。地方政府幹部が対面による私の着任表敬を受けてくださっているほか、厳格な感染予防措置をとりつつスラバヤ市政府主催の対面行事も実施されています。



コフィファ・東ジャワ州知事を表敬訪問

上で述べたように日本とスラバヤをはじめとする東ジャワ州は深い関係を持ち、これまで日本の官民でこの地域で進めてきた様々な事業や活動があります。現在は新型コロナウイルス感染症の拡大による影響を受けているものもありますが、ウィズコロナの様式で再開できるよう工夫したいと思っています。

東ジャワ州には、多数の日本語学習者や地方政府の要職についているような日本留学経験者もいます。日本にさらに関心や親近感を持ってもらえるような情報発信を行いつつ、こういった方々との関係を大切に将来の両国関係の礎となる層の拡大と関係強化に取り組んでいきたいと思っています。